



神社役員に付添われて、大綱小綱の毛槍が行列を先導する。
行列の進行速度調整と言う大役。



お神輿様が行く。この行列の主役である。毎年その年の
厄年のメンバーが担ぐ。
白衣烏帽子姿は清素であり又涼々しくもある。



八幡ばやしの面々。伝承芸能としての後継者育成にも力
を入れて、日頃の練習にも励んでいる。
小中学生の姿も見える。

鯛のない鯛祭り



月刊 第 562 号

長期予報で寺泊では白山さまのお祭、全国的には憲法記念日とこどもの日につながる五月初旬の所謂連休は心配なしの晴れのお日さまマークで、いつも話題になる神輿さまが上(かみ)からは雨祭りにやり易いなどと言う噂もささやかれぬままに迎えた今年のお祭。神楽の当番は四区。もうあまり感受性の乏しい初老の身にも五月晴れの中で迎え

る祭りの朝はやはり心浮き立つものがある。お祭り決行の花火が当然のことながら晴れやかな空に景気よく響きわたって先ずは子供神楽の一行がわいわい賑やかにお祝いを受けて神社へ向う。やがて大神楽が威勢よく新道の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。

かつては鯛祭りとも言われたこのお祭りにはご馳走の一品に鯛の佃煮は欠かせないものであったがここ数年漁になるほどの鯛が獲れないと言うことで地物の鯛にお目にかかることが出来なくな

った。丁度季節的に筍の時期に当りこれも又定番と言ってよい料理なのだが、今年の出が悪いとのことで頂き物も品不足。祭りを迎えるに当っては町内のトブ揚げの一勢清掃があり、各町内全戸協力で汗を流す。終れば祭りの話を肴に一寸慰労の一杯。今年引きつづいて「みどりの日」には海岸の清掃が行われた。各海水浴場を中心に野積から山田へかけての長い海岸線へ村部からも又県外からの参加者(特に友好関係の群馬県、埼玉県の市町からのボランティア)又マリナー利用の県内他町村から

の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。

の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。

の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。

の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。

の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。

の坂を駆け抜けて行く。と次第に祭り気分の高まりが町全体に漲って行くのが何やらいつもと違ったさわめきとなって伝わってくる。



四区の神楽である。勢にまかせて町内駆け廻ることになるのだが、頭(かしら)持ちは仲々の重労働で次々に交代しないとたない。



一軒づつ廻って頭を噛む。噛んで貰うと一年息災に過ごせると言うことである。体の中の厄病神を追いはらって貰うとゆうわけである。



たまりもたまったり一冬でこれ程のゴミが海岸に打上げられる。一見自然のゴミのように見えるが人工ゴミも随分混入している。美しい海辺で夏を迎える為のボランティア清掃活動。

言い伝えがあり、今年是不景気風が吹き荒れる中だけに仲々の配慮と見たが、その効果や如何に。露払い役とも言える神楽が駆け抜けてゆくと愈々神輿さまのお下りである。

各町内神社のお馬引き絢爛の衣装を着飾った木馬が子供達に引かれてカラカラと車の音を響かせて進み、楽人の奏でる笛太鼓とシンバルの合間の掛け声の中おかめが優しく首を振り乍らつづき、今年の厄年の青年達の担ぐ神輿、烏帽子と白装束の彼等はいつもより凛々しく謹厳に見える。大天狗に烏天狗も日頃の練習で確かな足取り、勿論先頭を行く大綱小綱の毛槍は行列の速度調整の役割も荷負う重要

ポストである。最後につづくお供は数人で昔日の面影(神社総代はじめ町のお歴々が多く参加された時代もあった)もないが行列が近づくと下げておいた巻簾を上げて迎える家々の人達に挨拶を交し乍らの一日は大変なことであろうとその御苦労をおざらいたい。

祭りの宵は何やら普段よりゆったりと時が流れるような気分分、トントコトンと夕風に乗って神社から聞こえてくる大夫舞の太鼓の音やお参りの行き交ふ人達の久々に顔を合わせての挨拶、子供達のはしゃぎ廻る賑やかなさんざめき等々日常から少し離れた音や動きが複合的に祭りの雰囲気をも出し出してくれる。

祭り頭、祭り下駄などは巳に死語となつてしまつたが、祭りのご馳走に心踊らせて家族客人揃って賑々しく話もはずんだあの日がなつかしい。

お祭り気分になつて

さとう・のぶひと

あまり耳にしなくなりました「盆暮れ勘定」という言葉がありました。かつて借金の支払い、は、現在のように月締めでなく、お盆と暮れの年二回でした。寺泊でも農村部では、共益費(町内費)の徴収は今も「盆暮れ勘定」です。

いつ頃から始まつた習慣なのか判りません。しかし、江戸期にはすでにあり、つい最近まで

あつたということ、随分長期にわたつて日本人の生活習慣になじんできたと言えそうです。日本人は、借金について寛容な民族だつたのかもしれない。

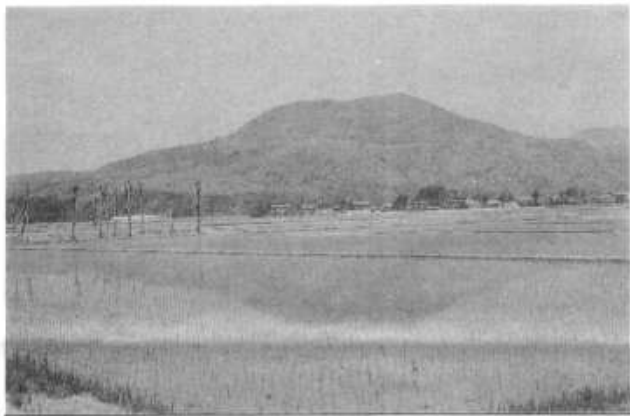
まずお盆を指して走る。ともかくにもお盆までは、と頑張り張つて働く。そしてお盆になつて、気の抜けた数日を過ごした後、今度は暮れを追いかけます。暮れを目標にまた働きます。生きてその生を全うすること、多かれ少なかれ経済活動に参画することであり、それが「仕事」と呼ばれます。日常性の世界です。

お盆とお正月には、仏事、神事と結合した祝祭空間が広がり、非日常性の世界を演出します。

いわゆるお祭り気分です。その合間に、さらに春祭り、秋祭りなど農村協同体由来する祭礼行事が挿入され、非日常性の世界は拡大します。

お祭り気分に乗ることは、日常性である「仕事」につきまとうストレスが回収されることで、お祭りの時の心理状態は、まず自由、そして大人も子供もなく平等、さらに多少の悪さをしても許されるといふ解放感。無政府的な危険な状態とも言えますが、心の理想状態でもあります。

さて寺泊の今年の五月は、お祭りが二回ありました。三日、四日は恒例、白山媛神社の大祭でした。暑いほどの好天に恵ま



田植えも終り早苗が葉先を五月の風にそよがせ、田面に新緑の国上山が映る。さわやかな季節である。



弥彦山への野積からの道路脇にこんな地藏さまがおらっしゃる。雨の季節を迎えるためにミノカサが贈られた。



快晴連休の港の岸壁は釣人で賑わう。小アジや稚アユが釣れる。春の日光は強烈、日焼けにご注意。

小波会四月句会詠草

兼題 山笑ふ・踏青他当季

山笑ふ

開店を待つ峠茶屋

北陸道 竹内 霍山

抜けて湖の国山笑ふ

小島 冬扇

山笑ふ

村に久久嫁の来る

良きことの 外山きよし

重なる家や山笑ふ

外山 海子

青き踏む

後追ひの嬰双手あげ

大越碧水子

再検査

まずまず言われ青き踏む

水沢 蕉子

踏青や

即身仏の座禅石

能登 頑牛

踏青や

大地の鼓動足裏に

江原 汀子

青き踏む

なぞりて碑誌の刻あわし

内藤 広利

回り道

せずに真っ直ぐ青き踏む

小島 温石

青き踏む

一人静々風の中

中村 流瓢

春愁や

杖に凭れてただ歩く

齊藤 紫苑

丁寧

髭剃り直し牡丹の会

加勢 白汀

葉桜や

暗き土間もつ武家屋敷

小形 美代

深々と

埋るくるぶし芹を摘む

矢尻ゆきを

祭りのあとの淋しさは遠く散かに耳底に残る太鼓と笛の音が雨を含んださみどりの風に吹かれて消えてゆく

あとがき

たたみはじめた金魚屋のえくぼの優しいおばさんに貰った金魚が三日目に死んで浮いてた金魚鉢ぽやけて水に溶けそうなの赤い金魚のあの色を梅雨の晴れ間の茜雲に見るたびふいに思い出す

夏のように汗ばむ日があると思えば急に冷えびえとした日が来たりして片付けてしまった炬燵が恋しく思われたりと不安定な天候の中で五月も終ろうとしています。観光まつりも天候に恵まれる中で成功裏に終り愈々夏の観光シーズンへ向って期待がふくらんでゆくふるさとです。先月号について一読者から誤字

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹
発行人 中 村 興 樹
発行所 新潟県寺泊町
ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五
電話 二〇二九九番
振替番号 〇〇六二〇三三五四五

印刷所 吉野印刷株式会社